

極楽寺(二俣瀬) ―春の彼岸(春分の日)講演会―令和三年三月一八日(木)

宇部市制100周年記念講演

ウベ100歳と俵田明

堀 雅昭

《はじめに》

- ① 一〇〇年前の宇部
- ② ナチと「秋水」
- ③ 俵田明のイノベーション
- ④ 最初の外遊〔昭和二年一〇月〜同三年六月〕
- ⑤ 二度目の外遊〔昭和七年八月〜同八年一月〕
- ⑥ 「革新」の時代
- ⑦ 宇部 City の出現



《はじめに》

極楽寺の春の彼岸(春分の日)の法要に、お招きを戴きありがとうございます。

前回、お招きいただいたのが三年半前になる平成二九年九月の秋のお彼岸講座でありました。そのとき「極楽寺の木喰仏」と題しまして、極楽寺の五体の木喰仏をご紹介し、立派なものでありますので宇部市の文化財にしたら良いという講演をさせていただきました。それでこの春、ようやく文化財指定となるこのことで、大変良かったと思っております。

さて、それで本年は大正一〇年の宇部市制施行から一〇〇年目という節目なのであります。それで本日は、せっかくですので、それに関するお話をさせていただきます。今回の主人公は、宇部興産の初代の社長になられた俵田明さんです。では、少しばかりお付き合い戴きます。



① 一〇〇年前の宇部

本日の会場となっております二俣瀬は、今は宇部市二俣瀬ですが、それは戦後の昭和二九年一〇月に、厚東村と小野村、東岐波村と共に宇部市に合併したからでありました。私が住んでおります藤山村は昭和六年に宇部市に合併しております。

したがって一〇〇年前の宇部の範囲は今より小さかったわけです。小串、川上、上宇部、中宇部、沖宇部を併せた地域です。そんな宇部「村」が、「町」を飛び越え、いきなり「市」になるのですが、飛躍の理由は炭鉱の発展でした。

「村」から「市」への飛び級は全国的にも珍しく、大正一〇年九月一九日付の『東京朝日新聞』が「村制から一躍市制の申請」と題して、「村制から一躍市制の施行は従来例のない事である」と報じています。

② ナチと「秋水」

ところで俵田明は宇部興産の初代社長です。宇部興産は便宜上、宇部興産の初代社長を渡邊祐策としていますが、渡邊さんはその前身の沖ノ山炭鉱の創業者で、昭和一七年三月に沖ノ山炭鉱を軸に、そこから派生した宇部窒素工業、宇部セメント製造、宇部鉄工所の三社が合併する形で生まれたのが宇部興産です。当時の表現を使えば沖ノ山コンツェルンです。そのコンツェルン化を成し遂げたのが俵田さんでした。

すでに昭和一六年二月八日のハワイ真珠湾攻撃で、大東亜戦争は始まっておりまして。そして昭和一九年一月に軍需会社に指定されます。大東亜建設のための戦争により生まれた国策会社が宇部興産だったわけです。その中心にいたのが俵田さんです。おかげで宇部の市街地は米軍の空襲を受けます。軍需工場だったからです。

【①】



じゃかん

な冷却装置です。小野田の皿山で製造して、宇部窒素工業に納入していた器材でした。

実は「秋水」は、ナチが開発したロケットエンジンの設計図を基にして造られる予定の和製ロケット戦闘機でした。ドイツは第一次世界大戦で敗れて飛行機の製造に規制があったので、プロペラのないロケットエンジンを開発したのです。それを日本がモデルにしたのが「秋水」です。しかし実戦で使う前に、日本は戦争に敗れました。宇部窒素工業がもう少し頑張っていたら、「秋水」は飛んでいたかもしれません。

もうひとつ、軍事産業で有名なのが宇部油化工業です。

こちらも俵田さんが主導して昭和一四年八月に創業されています。石炭から、石油を合成する工場です。というのも七月にアメリカが「日米通商航海条約の廃棄」を通告したので石油の輸入が出来なくなるので、石炭から石油を合成しようということになったわけです（実際に昭和一五年一月に石油は入らなくなる）。石油がなければ戦闘機は飛べないわけです。それで厚東川河口の藤曲（二六万坪）を工場敷地として造成しながら人造石油を作る工場の建築を進めます。残念ながら、こちらも戦闘機を飛ばせるだけの石油の合成にたどり着く前に、日本は敗戦を迎えます。油化工場は空襲で焼けました。この写真は、居能の小林実郎さんが昭和二五一年ころライカで撮った油化工場の風景です【②】。宇部油化工業がもう少し頑張っておれば、戦闘機の燃料も補給出来て、戦局も変わっていたかもしれません。

③ 俵田明のイノベーション

もちろん俵田さんは軍需工場にするために石炭産業の化学工業化を進めたわけでは
ありません。ただ、結果的にそうなったのです。

俵田さんは明治一七年一月に小串で福原家臣の家に生れますが、いわゆる没落士
族の子供なのです。満足に進学校にも行けず、いわゆるエリートの道は歩けなかったひ
とでした。自分で努力して大阪で英語を学んだりして、最終的に東京築地にあつた今で
いう専門学校の手学校を出まして、陸軍の火薬工場に職を得るわけです。それで渡
邊祐策に頼まれて宇部に戻り、沖ノ山炭鉱に入ったのが大正四年四月、三一歳のときで
した。沖ノ山炭鉱は、渡邊さんによって明治三〇年に創業した炭鉱でした。日本は大正
三年八月から第一次世界大戦に参戦して、各地でイノベーションが求められていた時代
です。

そこで俵田さんは沖ノ山炭鉱の保安係兼機械係として、蒸気ポンプから性能の良い
電気ポンプに切り替える仕事に、まずは取りかかるわけです。入社直前に起きた東見
初炭鉱の水没事故を教訓に、より安全な職場にするためです。

つづいて宇部電気会社の発電機の増設も手掛けます。電気ポンプを増やすには、発電
所の能力の向上が必要だったからです。



大正四年八月二五日付の『宇部時報』には俵田
さんの手で宇部電気会社に設置されたばかりのゼ
ネラル・エレクトリック社製の巨大なカーチス・バ
ーチカル・ターボ発電機の前に立つ俵田さんの姿
が見えます。下段の左端が俵田さんで、その右側
の黒服が濱田浅一、中段右から上郷與吉(支配人)、
渡邊祐策(社長)です【③】。

このとき日本は戦争景気が訪れ、石炭増産の時代を迎
えていたのです。

宇部の炭鉱は沖ノ山にしても東見初にしても海底炭鉱
なので、海底に長く延びる坑道では蒸気が冷えてポンプ
が作動しなくなるので、ほとんど電気ポンプをつかうこと
になるわけです。この時代の宇部炭田開発は、俵田さんが
主導した電力主義によってまず成し遂げられたわけです。
俵田さんが手がけたこうした技術革新が宇部の近代化の
第一歩となり、また、そのことで炭鉱労働者人口も急増し
するわけです。

例えば大正四年度の人口は一万六一五三人ですが、戦
後の大正九年度には一万九六八一人であり、三五〇〇人
余りが増加しています(大正一三年度「大正一四年三月発
行」の『宇部市制要覧』。電気ポンプの採用が、労働者人口
増加をもたらしたわけです。

【④】



こうした急成長の最中であつた大正六年三月に、俵田さんが新規事業として手がけたのが宇部紡織所の創業です。これも電力と機械を導入した新しい企業であり、同時にまた労働力としての女性の社会進出を後押しします。こうした近代化の流れに沿つて訪れたのが大正一〇年一月の宇部市制施行だつたわけです。

つづいて二年後の大正一二年九月に、俵田さんはつぎなる「革新」として宇部セメント製造の創業に奔走します。俵田さんの家(琴芝の旧俵田邸)には、セメント工場を建てる際の地鎮祭の様子が写真に残されています【④】。中央の神職の左の左にいるのが若き日の俵田さんです。

この写真は、もはや石炭だけではない宇部も誕生を暗示するものです。実際、宇部セメント製造の事業にはアメリカの技術者ドーを招き、アメリカの製造機械を導入しております。宇部の外来文化の流入は、炭鉱の近代化の中で俵田さんが中心になって推進されたのです。そのうちに、もつと高品質のセメントを造ろうということになり、俵田さんは部下の中安閑一さんを連れて最初の海外視察に旅立つわけです。

④ 最初の外遊〔昭和二年一〇月～同三年六月〕

俵田さんの最初の外遊は昭和二年一〇月から翌昭和三年六月まででした。

俵田さんの家には、日本郵船の大洋丸の船上で中安さんと一緒に写った写真があります【⑤】。

二人はアメリカで発電所やセメント会社を見学したり、自動車会社のフォードなどを見たりしました。宇部セメント製造で雇ったドニー技師もアメリカに戻っていて、俵田さんたちの道案内をしております。



それから昭和三年に入るとヨーロッパに渡ります。宇部興産の UBE-Plant には、このとき俵田さんが使った大型トランクが展示されています【⑥】。

その後は、ベルリンでアルゲマイネ社（AEG）を訪ねております。一八八三年にエジソンから電球の特許を得てはじまった総合電機会社ですが、そこで予め宇部から送っていた大派炭三〇トンのテストを依頼すると、低温乾留（六〇〇度程度で石炭を加熱してタールや乾留ガス採取する方法）の工場を視察します。すでに石炭の化学肥料化やガス化、すなわち後の宇部窒素工業や宇部油化工業の創立につながる技術の模索を始めていたわけです。

【⑥】



また、ライプチヒでは、山口高等商業学校（現、山口大学経済学部）教授の国吉省三（留学中）と会っております。帰国後に俵田さんと国吉さんはヨーロッパにあったような社交クラブを作ろうとしたのですが、そのときはうまくゆかず、ずっと後の昭和三年七月一〇日に宇部にロータリークラブが出来るまで待たねばなりませんでした。ただ、後で示すように宇部工業倶楽部と工業会館は帰国後に造っております。

俵田さんはパリではシャンゼリゼ通りを歩いていました。その西の端のエトワール凱旋門の前に立つ姿を写した写真も残っております【⑦】。

ヨーロッパにはこうしたアベニューに街路樹があるわけです。

【⑦】



舗装された車道と歩道が分離された近代的な道路で、このとき俵田さんが目にした風景も宇部に移植されています。例えば二度目の外遊後に立ち上げた宇部窒素工業（昭和八年四月創業）の前を通る（開通は昭和八年九月）沖ノ山モダン道路などがそつでした【⑧】。

【⑧】



【⑨】



実は俵田さんが帰国して迎えたのが世界恐慌でした。昭和四年一〇月にはアメリカでバブルが弾けて、ニューヨークで株価が暴落するわけです。株価暴落直後の昭和四年一月二九日付の『宇部時報』には「具体化して来た宇部の社交会館」という記事が見えます。

俵田さんが主導して建設プランを進めた「社交倶楽部」用の建物、それが先ほど申した宇部工業会館になるのですが、その建築計画が世界恐慌にもかかわらず動き始めていたわけです。ヨーロッパにあったような工業分野の社交クラブを宇部にも造ろうという発想で、宇部工業会館は昭和六年六月に開館します【⑨】。

⑤ 二度目の外遊(昭和七年八月～同八年一月)

世界恐慌の影響は、もちろん宇部にもありました。

ところが宇部工業会館建設計画を伝える前出の昭和四年一月二九日付の『宇部時報』の紙面に、もうひとつ俵田さん絡みの興味深い記事が出ているのです。

「宇部鉄道の電車は明日廿九日より運転開始」

昭和二年七月に創業された宇部電気鉄道が、いよいよ電車を走らせるという内容です。

【⑩】



この電車構想については石川実蔵さんが、「社長は渡辺翁、専務が俵田現社長で、構想は俵田さんが全部やられた」(『宇部興産六十年の歩み』)宇部電気鉄道に着手」と明かしているように、全てが俵田さんの計画で進められたようです。電気で排水ポンプを動かして海底炭鉱を成長させたように、今度は大恐慌下の宇部に電車を走らせるといふ俵田さん流

の「革新」構想です。ちなみにこの電車のランプだけが、小串の高良宗昭さんのお宅の玄関に残っております【⑩】。

実は、俵田さんの電車構想には続きがありまして、昭和一四年から沖ノ山炭鉱の海底に電車を走らせる実験も行っていたのです(※1)。そして大東亜戦争の開始後の昭和一八年十一月に「貫通式」を迎えておりました(※2)。

関門海底鉄道トンネルの起工式が行われたのが昭和一四年五月ですが、同時期に沖ノ山炭鉱も独自の技術で海底トンネルを掘って、電車を通す工事をしていたのです。

宇部では昭和一六年八月終わりに、海底電車のトンネル工事の視察が行われ、『宇部時報』の九月二日、三日、四日、六日の四回に分けて「沖ノ山炭鉱坑内電気工事 現地報告」の連載で報告されています。副題は「地下七百尺海底隧道視察記」です。

【⑪】



この記事を書いた宇部時報主筆の杉谷敏一さん(故人・宇部市梶返)の所蔵写真に、当時撮影した海底電車道の工事写真が残っていました。トンネルの天井をセメントで塗り固めて、強度を確保する工事風景です【⑪】。この海底トンネルを電車が走るわけです。

大恐慌時代に話を戻しますと、日本全体の景気が回復するのは、宇部工業会館が開館した三か月後の満洲事変まで待たねばなりませんでした。昭和六年九月に関東軍が決起して、大陸にアジアの自由経済圏を建設する行動に出るまでは、非常に景気が悪かったわけです。しかし翌昭和七年二月の満洲建国が出来るころには経済は好転しております。国民はこのとき関東軍に拍手を送り、日本はこの事件をきっかけにファシズムが勃興します。ファシズムは新しい思想として、恐慌を乗り越える「革新」として受け入れられ、ブームになるわけです。

もはや機能しない英米流のアダム・スミス型の自由主義経済とは違う計画経済で乗

【⑫】

り切るという実験であり、その発想を実現する手段としてファシズムは国民に受け入れられたわけです。その意味でファシズムは民主主義の一部であり、もったいえばポピュリズムの究極の形だった。実際に満洲はそんなファシズムの実験場として機能し、そのことで日本も経済が盛り返したわけです。満洲事変から経済が回復して、満洲建国でいよいよ日本の将来への道筋が見えはじめる。「満蒙は我国の生命線である」「動く満蒙」と語ったのは松岡洋右です。

時を同じくして食糧自給と農業振興の問題が表面化します。どうすれば食料自給率があがるかと議論が起きたとき、化学肥料の必要性が叫ばれるのです。

そこで化学肥料の原料となる「硫酸」を製造できる会社を立ち上げようと、いよいよ俵田さんが二度目の外遊に出たのが昭和七年八月から翌昭和八年一月かけてでした。このとき同行したのが、大日本人造肥料株式会社(日産化学の前身)の技師・大山剛吉です。

イタリアではムッソリーニが化学肥料を用いた農業振興策が成功していました。

ドイツでは化学肥料の時代は既に終りを迎え、昭和八年一月にヒトラーが政権を取ると、農業に頼らない自然農法を推進しております。

ただ、日本は満洲国の農業振興も急務でした。食料の自給率を高める必要に迫られ、化学肥料の工業生産がこの時期から飛躍的に伸びるのです。

俵田さんは二度目の洋行で、一度目と同様にアメリカ経由でヨーロッパを視察し、宇宙窒素工業を立ち上げるのに必要な機械の選定を行います。そのとき、わざわざミュンヘンでヒトラーの●「邸宅」まで見に行っておりました。この話は俵田さんが『宇宙時報』に発表していた外信記事(昭和七年十一月三日付「今をときめくヒトラー」)に出ています。

ヒトラー政権誕生を前に、ナチの発祥地であるミュンヘンで俵田さんはヒトラーの人気の高さを体験します。

そのとき見た「邸宅」とは一九三九(昭和一四)年に完成された総統官邸ではなく、ナチ党本部の褐色館(一九二八(昭和三)年完成)と思われます【⑫】。若いナチ党員たちが拳手をしながら訪ね来る人たちを迎え入れる姿を見て、「戦前まで何等なんらの名声なく、国籍こくせきさへなく、四十幾歳いっぺんの今日まで放浪国土として嫌はれてゐたヒトラー氏かと思へば、お伽話おとぎばなししの主人公のやうにも思へる」と、俵田さんは素直き驚きを語るわけです。



第一次世界大戦前まで放浪者だったヒトラーが、国民的英雄になっていたのですから、驚くのも当たり前です。俵田さんはナチ党のハーケンクロイツについても、「お大師様のそれと軌を一にするもの」と妙な親近感を抱いております。

実は後にヒトラーを支えるナチ・ドイツの化学会社IGファルベンのような高い技術力を持つ化学会社を、俵田さんは宇部に造りたかったようなのです。

この会社は一九二六（昭和元）年に、石炭からガソリンの合成に成功していました（『ナチス 破壊の経済 上』）。少し後になりますが、俵田さんが宇部油化工業を立ち上げたのが昭和一四年八月でした。

〔※1〕 岩沢栄は「沖の山炭鉱の海底電車」（『宇部興産六十年の歩み』）で、「沖の山海底電車トンネル」の行動掘削工事を（昭和一四年）七月一四日からはじめたと書いている。

〔※2〕 昭和一八年一月五日付『朝日新聞（山口版）』『科学の花道』。

⑥ 「革新」の時代

第一次世界大戦期から、俵田さんの主導した石炭産業からの「革新」事業を鳥瞰すればつぎようになります。

まず、大正四年からの排水ポンプの電氣化にはじまり、電氣会社の発電機の増設（大正四年）、宇部紡織所の創立（大正六年三月）とその結果としての女性の社会進出、宇部セメント製造の創業（大正十二年九月）、電車の開通（昭和四年十一月）、宇部窒素工業の創立（昭和八年四月）、海底電車のトンネル工事（昭和一四年七月～昭和一八年十一月）、宇部油化工業の創立（昭和一四年八月）と続くわけです。

それだけではなく、大正一〇年一月に元内務省土木技師の篠川辰次を技術者の目で見定め、宇部に連れてきたのも俵田さんでした。以後は、篠川さんと二人三脚で沖ノ山上水道（大正一二年五月～）や宇部港の築港（昭和二年一〇月～）などにも取り組みます。先ほど紹介した宇部工業会館（昭和六年六月）なども、篠川さんを窓口にして建てさせた宇部で最初の迎賓館機能を持つ本格的な洋館でした。もちろん宇部セメント製造や宇部窒素工業の初期工場、宇部電気鉄道（昭和二年七月）、西沖干拓（昭和一四年五月～昭和二四年五月）なども俵田さんが篠川さんを指揮して、完成させます。

こうした事業は沖ノ山炭鉱の代表であった渡邊さんの業績となっていますが、その発想や立案計画が技術者の俵田さんが主導したという意味では、やはり実質的に俵田さんがやった仕事なわけです。

それで渡邊さんが昭和九年七月に亡くなると、俵田さんが昭和一〇年初頭に建築家の村野藤吾を連れてきて、渡邊翁記念会館（昭和一〇年一〇月～同十二年四月）を建てさせるわけです。それは山口県初の本格的なオーデトリウム（音楽堂）という非常に文化的な施設として姿を見せます【⑬】。つづいて二代目宇部銀行（現、ヒストリア宇部）

や宇部窒素工業事務所棟なども村野の設計で完成しますが、例えば窒素の事務所棟などにも工場内の蒸気熱を利用した暖房設備を整えたり、トイレを水洗にしたり（昭和一五年八月の宇部窒素工業事務所棟の建築申請書）、労働者を重視した建物を造らせるわけです。人間中心の街づくりを推進し、文化的な「革新」まで牽引してゆくわけで、このような戦前からの積み重ねが、戦後の「花と緑と彫刻のまち宇部」の土台になり、あるいは嗣子の俵田寛夫さんの音楽による戦後復興を成功させる「宇部好楽協会」を生み出す源流にあるのです。もう一つ見逃してはならないのが、こうした俵田さんの「革新」主義が、大正一〇年一二月の宇部市制施行と密接に関係していたことです。

【⑬】



⑦ 宇部 City の出現

大正一〇年十一月の宇部市制施行の目的は、第一次世界大戦の終盤に新川で起きた米騒動(大正七年八月)とその後の社会改良を目指した結果でした。

それは世界的にもユートピアを求めた時代で、日本でも文学界で白樺派の武者小路実

こうふへんせきじ

篤が大正七年九月から宮崎県児湯郡木城で「新しき村」の建設をはじめております。また、山口県では久原房之助が大正六年に下松の笠戸湾に面する一帯に造船を柱とした「下松工業地帯ユートピア構想」を立ち上げております。

日本で「都市計画法」が制定されたのが大正八年四月で、東京、京都、大阪、横浜、神戸、名古屋の主要六都市で「道路、港湾、鉄道、水道」を考慮した街づくりがはじまります(『都市計画要覧』)。

その時期、宇部は農村として生きるか、工業都市となるかの選択を迫られていました。

二つの価値観が対立していたことが、大正一〇年一月三日付の『宇部時報』(「市制施行の根本理由」)に見えます。しかし第一次世界大戦で東京や大阪など大消費地が成立しており、大戦による輸入途絶が技術革新を寓意し、例えば大正七年に豊田佐吉が豊田自動紡織株式会社を設立したり(現在のトヨタ自動車)、大正一〇年には北里柴三郎らが発起人となって赤線検温器株式会社(現在のテルモ)を創業したり、イノベーションが起きています。

とこなみたけじろう

ユートピアと都市計画、技術革新の波が訪れていた大正九年二月六日に、宇部に内務大臣の床波竹二郎が宇部に来ました。このとき新川座で「民力涵養」の講演を行い、

みんりよくかんよう

同行した衆議院議員の津野田是重がフランスのデモクラシー思想を語りました(同年一

つのだこれしげ

二月一二日付『宇部時報』「時事管見 内相と宇部」)。

特に津野田は「新民主主義」を紹介して、平等主義に立った意識改革と工業都市になるための古い封建制の打破を訴えました。つづいて大正一〇年一月には工学博士の加茂正雄が宇部に来て、東沖ノ山炭鉱の手島式煤煙完全燃焼器を見学し、公害対策を論じております(大正一〇年一月九日付『宇部時報』「石炭の燃焼器 来宇中の加茂工学博士談」)。

宇部市制施行は、こうした「革新」ブームの中で大正一〇年十一月に施行されたわけです。宇部 City の出現は、「革新」の宇部の登場でした。

その時期は技術革新とユートピア、そして人間中心の社会を求める時代でした。人々は新しいものを求めているわけです。

市制施行の祝賀会は少し遅れて大正一二年五月に新川講堂で行われます。このときのお祭り騒ぎが写真に残されています【⑭】。

【⑭】



俵田さんが奔走して宇部セメント製造が誕生したのが、それから四ヶ月後の大正二年九月でした。市制施行祝賀会は、産業分野での「革新」を祝うようなタイミングだったわけです。

宇部はこれまでの黒い石炭から、セメントという白い素材の生産拠点となるわけです。市制施行で、黒(石炭)から白(セメント)に変化したのです。

大正一四年三月にセメント工場が動き出し、実際に白いセメントが出来たとき、真の意味でCityとしての宇部を実感できたでしょう。文字通り、新しい時代のはじまりです。

この「革新」的な新素材をふんだんに使って、俵田さんが村野さんに造らせた奇想天外な巨大オーデトリウムが渡邊翁記念会館だったわけです。

渡邊翁記念会館は市制施行から一六年後の昭和一二年四月に竣工しました。その全景を渡邊翁記念会館の二階に展示されている模型で見ることが出来ます【15】。この斬新で奇抜な建物が「革新」としての市制施行の結果を、市民の目の前に具体的に示したものだっただけです。Cityとしての宇部の具現です。

余談ではありますが、渡邊翁記念会館前の方形の台座が沖ノ山炭鉱を象徴しており、両側に三本ずつ並ぶ六本柱が宇部窒素工業、宇部セメント製造、宇部鉄工所、宇部電気鉄道、新沖ノ山炭鉱、宇部紡績を表しているといわれています【16】。この六社は俵田さんが沖ノ山炭鉱を「革新」する形で誕生した新規事業でもあったわけです。奇想天外の巨大で斬新な音楽堂を建築家の村野藤吾に建てさせたのも俵田さんであり、それは渡邊さんを顕彰する建物であると同時に、俵田さんのイノベーション主義を見事に体現した宇部Cityのシンボルとなったわけです。ということで、本日の講演は、「City」で終わります。ご清聴、ありがとうございました。

【15】

